感動は、人生の道しるべ

～４年３組ゴールパスゲーム～

仲島　正教

私にはどうしても忘れることのできない授業があります。それは今から１０年ほど前、私がある小学校の４年３組を担任していた時のことです。私のクラスには足に障害があり、装具がないと歩けないＡさんという女の子がいました。クラスの仲間たちはＡさんのためによく動いてくれました。Ａさんがつまずいて倒れた時は、すぐにとんできてＡさんを助けてくれましたし、重い荷物があれば、必ず持ってくれました。

そんな中、体育の授業でバスケット型のボールゲームをすることになりました。子どもたちは、Ａさんも参加できるようにと内容やルールも新たに考え出しました。子どもたちはこれを「ゴールパスゲーム」と名づけました。そして試合が始まりましたが、なかなかうまくいきません。その時の様子をＡさんは次のように書き記しています。

> ・・・その後も何回試合をしてもチームは負け続けてしまいました。私は何度やっても思い通りに動けない自分に腹が立ち、チームのために自分はやめた方がいいのではないかと思いました。でもその時、先生はじめ友達全員が、どうしたら私のチームが強くなるかを考えてくれたのです。そんな友達をみていてやめてしまおうかとあきらめかけた自分が情けなくなり、もう一度がんばろうと思い直しました。また放課後の練習が始まり、いくらやっても入らなかったボールが何度も繰り返してやっているうちに入るようになり、やれば私にもできるんだと自信がついてきました。・・・・・・・・・・・・・・試合の時・・・友達に言われたことを思い出し・・・夢中でやりました。私のシュートも何本か入り、チームはなんと勝つことができたのです。私はうれしくて飛び上がりたいほどでした。でも私以上に喜んでくれたのはチームの友達でした。文句も言わずに毎日といっていいほど放課後の練習を一緒にやってくれました。だからこそ私もがんばれました。・・・・この「ゴールパスゲーム」は体育の授業ということを通りこして人と人との交流ができたすばらしい機会でした。私自身それまではそんなふうにみんなと同じように参加できるとは思っていませんでした。何をするにも、みんなより遅くなることが当たり前でみんなと同じように行動できなくて、腹立たしくみじめに思ったことが何度もありました。でもこの時は、自分の障害のことを忘れて一緒に楽しむことができました。・・・・・・・最後の試合の後、みんなで泣いてしまったことを思い出します。

この授業をしてから子どもたちは変わりました。今までならＡさんが倒れたらすぐにかけつけ助けていたのに、だんだんと手は出さずに「Ａさん、自分で立ってごらん」と声だけをかけるのです。そして自分で立ち上がったＡさんを見て笑顔でうなずくのです。ある時は倒れても知らぬふり。子どもたちは「してあげる」から「いっしょにする」仲間に変わっていったのです。一緒に苦しみ悩み、一緒に喜びながら、共に成長していったのです。私はこの子たちから「本当の優しさ」とは何かを学んだ気がしました。「本当の優しさ」と

は、憂いのある人のそばに寄り添うだけではなく、一緒に悩み一緒に喜びながら共に強くなっていくことだとわかったのです。

さる 11 月 10 日に第 39 回西宮市人権・同和教育研究集会がありました。この研究集会にその「ゴールパスゲーム」の子どもたちが、２１歳の若者として参加してくれました。Ｂさんは「俺は部落ということをかくしたりはしない。堂々と生きていく」Ｃさんは「部落、外国人、障害・・・、そんなことは関係ない。僕は人間は尊敬しあうものだと思う。尊敬しあうことによって差別なんかなくなっていくんだ」Ｄさんは「信頼する仲間がいるから大丈夫。一つの目標に向かってがんばってきた。これからも夢をもって生きていく」Ｅさんは「こんな感動の授業を私もしたい。だから今、教師になりたいと思ってがんばっている」等、胸を張って主張する若者たちに私は未来を感じずにはおれませんでした。

障害のあるあのＡさんは、猛勉強をして難関の大学に入り、今、福祉の勉強をしています。彼女は最近こんなことを語ってくれました。「あの時の思い出は私の宝物です。あの感動が、私の人生の道しるべになりました・・・」と。

私は、こんな若者たちにこれからの人権教育を託したいと思っています。

２００２．１２　人権週間　　西宮市「わたしたちの人権」掲載